

令和4年度 駒大生社会連携プロジェクト 活動報告会



日 時 **2023年2月18日(土) 13:00~14:45**
開催方法 Zoomウェビナーによる配信
ウェビナーID : **867 4286 6697**
PW : **komaseed22**



令和4年度 駒大生社会連携プロジェクト 活動報告会 次第

1. はじめに

開会挨拶：各務 洋子 ～駒澤大学 学長～

本制度の概要説明：松信 ひろみ ～駒澤大学 学術研究推進部長～

2. 事例報告

○世田谷区 部門

■ 動画制作を通じた「せたがやの居場所」発信プロジェクト
(経済学部 現代応用経済学科 松本 典子 先生)

■ P B L 型授業のモデル構築 – 世田谷発の起業家教育 –
(経済学部 現代応用経済学科 長山 宗広 先生)

■ 地域プロジェクトで市民育ち – 用賀と深沢における参加型調査研究 –
(文学部 社会学科 社会学専攻 李 妍焱 先生)

○産官学連携 部門

■ 産学連携による新商品開発と新たな販路開拓の実践プロジェクト
～地場産業の新商品開発と中小企業の海外販路開拓の事例～
(経済学部 現代応用経済学科 吉田 健太郎 先生)

■ 社会連携ゼミ交流会
(経済学部 現代応用経済学科 大前 智文 先生)

■ 難民を知り、共生へ ～クルド人に学ぶ～
(法学部 政治学科 三竹 直哉 先生)

○SDGs 部門

■ 新入生セミナー×現代応用経済学科ラボラトリ コラボ企画
「現応ラボ 社会連携・SDGs活動セミナー」「現応ラボ 社会連携・SDGs交流会」
(経済学部 現代応用経済学科 山田 雅俊 先生)

3. 講評

4. おわりに

閉会挨拶：吉田 尚史 ～駒澤大学 副学長（教育・研究担当）～

世田谷区 部門

■ 動画制作を通じた「せたがやの居場所」発信プロジェクト

(経済学部 現代応用経済学科 松本 典子 先生)

「動画制作を通じた『せたがやの居場所』発信プロジェクト」

担当：駒澤大学 経済学部 現代応用経済学科 松本 典子

1. プロジェクトの目的

このプロジェクトは、世田谷区において地域コミュニティの人たちが安心して集まれる場所をつくっている、福祉系・まちづくり系の市民活動団体に取材を行い、NHK サービスセンターの星野豊アナウンサーの伴走支援を受けながら動画制作を行うプロジェクトです。最終的に NHK サービスセンターのインターネットメディア「ステラ net」(<https://steranet.jp/>) に完成した動画を掲載する予定で、学生にとって思い入れのある「せたがやの居場所」を全国的に発信していきます。

星野豊さんからは、取材、構成表作り、撮影、動画編集、ナレーション、そして配信方法などを座学で学びながら、同時進行で取材先との事前調整を進めてきました。大学生が気軽に動画制作にチャレンジできることを目指して始められたプロジェクトです。

2. プロジェクトの概要と動画制作団体

2022年7月2日に駒澤大学種月ホールで実施された「第3回せたがや居場所サミット」の参加団体と、これまでのゼミ活動で関わった団体の中から、学生が興味を持った団体に自分たちでアポイントを取るところからこのプロジェクトは始まりました。

松本ゼミからは9人のゼミ生がプロジェクトメンバーとして参加し、最終的に3団体の動画制作に臨みました。3団体の概要と制作メンバーは以下の通りです。

- (1) WARP HOLE BOOKS (世田谷区等々力2-18-17)：尾山台駅から歩いて2分の小さな書店。店主でデザイナーの黒川成樹さんの活動をもとに動画を制作。「子どもが育つ街に本屋がないことが嫌」が書店をつくったきっかけ。本屋紹介→黒川さん紹介→本屋の仕事とは？→本との出会い→本屋のイベント→人との出会い。「本屋インザダーク」のイベントに制作メンバー全員が興味を持ちました。
制作メンバー (5名)：海老根、千葉、永井、藤井、宮田



- (2) 世田谷子ども食堂「まつばらキッチン」(松原ふれあいルームを活用)：松原駅近辺で開催されている子ども食堂。企業、社協、地域の人たちなど、さまざまなひとたちのネットワークで活動が成立しています。
制作メンバー (1名)：高橋



- (3) NPO 法人砧・多摩川あそび村 (二子玉川駅近く、多摩川河川敷)：地域の宝である人と多摩川の自然を生かし、「あそび」を通じて、子どもが自ら育つ力と子育てを応援する居場所づくりが行われています。
制作メンバー (3名)：石井、永井、福岡



3. プロジェクトの進捗

2022年8月：せたがや居場所サミットの参加団体から、ゼミ生が気になった居場所を報告するオンライン・ワークショップを実施しました。その後、各団体にアポイントをとって、協力いただけるかを丁寧に確認しました。同時に、星野さんからは企画書の書き方をご指導いただき、各団体に企画書を提出しました。

2022年9月：取材勉強会を実施し、星野さんから取材方法についてご指導いただきました。星野さんが経験のなかで学んできた取材の心得を教えていただき、実際にあった例題を使って取材する立場になったつもりで練習を行うことで、さまざまな取材の場面に対応できる力を身につけました。

2022年10月：構成勉強会を実施し、星野さんから動画制作における構成表づくりについてご指導いただきました。事前取材の情報を付箋に整理しながら構成を考えることで、現段階で構成表にどのような要素が不足しているのか、あるパターンの構成表だとこのような動画が必要になるといったことなど、各グループが具体的に動画のイメージを共有しながら構成表を作っていました。10月末には撮影勉強会を実施し、星野さんから iPhone を使用した動画の撮影方法をご指導いただきました。撮影のポイントを学んだ上で、「秋を見つけよう」をテーマに、メンバー全員が各々に30秒の動画レポートを制作し、発表会を行いました。

2022年11月：構成討論会を実施し、動画を制作する上での構造を把握することの大切さを学びました。各グループで考えた構成表を報告し、他のグループのメンバーが意見を出しました。11月後半には再度付箋を活用して、全グループが構成表を練り直しました。

2022年12月：編集勉強会を実施し、星野さんから動画編集についてご指導いただきました。さらに、各グループの進捗報告会も実施しました。グループによって進捗が異なるため、撮影を始めたグループが実際に感じたことや悩んでいることを共有しました。課題はしっかりと整理し、その後の撮影に反映させました。

2023年1月：全グループが撮影を複数回行い、撮影を終えました。各グループ2月中の動画完成に向けて頑張っています。



4. プロジェクトを終えて

このプロジェクトには裏の目的として、教育的な目的がありました。それは、取材先との信頼関係を築きつつ動画を制作することで、企画力、交渉力、表現力を身につけることです。魅力的なせたがやの居場所を一般の人に発信するためにどのような言葉で伝えるのが効果的か、学生たちが動画の発信者として役立つスキルを学ぶことができました。以前、ゼミ活動の一環として行った動画制作において様々な改善点が見つかったことを踏まえて、このプロジェクトには、みんなにとってより良いものを作りたいという思いが込められていました。

動画を撮らせていただく団体における事前取材なども含め、半年以上のやり取りは大変な一面もありましたがアナウンサーの星野さんが各グループの活動を親身にサポートしてくださり、レベルの高い技術を学ばせていただくことができました。

「ステラ net」で動画が公開されましたら、ぜひ多くの人にみていただきたいです。よろしくおねがいします。

世田谷区 部門

■ **P B L 型授業のモデル構築**
－世田谷発の起業家教育－

(経済学部 現代応用経済学科 長山 宗広 先生)

PBL型授業のモデル構築 - 世田谷発の起業家教育 -


アントレナーシップ養成講座

駒大生社会連携プロジェクト活動報告会
2023.2.18

担当教員 経済学部 長山宗広

アントレプレナーシップ養成講座

- 経済学部の2022年度新規開講科目（前期、木・4時限）
- 問題解決型学習（PBL：Project Based Learning、実践体験型PBL
- 履修者は、経済学部2年～4年の160名
- 14チーム（1チーム当たり11～12名）に分かれてグループワーク
- 3つの企業と連携。①三茶ワークshop、②興アザイコミュニケーションズ、③興シンシアージュ
- 企業の課題（新規事業創出等）に対して学生が提案。4コマで対応（最終回はBP発表会）



- ★1つ目のPBL担当は、三軒茶屋駅近でワークスペースを運営する三茶ワークカンパニー(興)
- ★プレゼン大会で優勝した学生チームと三茶WORKshopの起業家3名（右端：千田弘和代表、左端：高橋秀紀氏、左から2番目：吉田亮介代表）
- ★本支援制度を活用して、三茶WORKの提供する「起業スクール講座プログラム（8月開講、4カ月間）」へ3名を派遣

「こどハピ」オンライン授業

■ 2つめのPBL担当は、シンシアージュが運営するオンライン子ども大学「こどハピ」に関する企画立案。

■ 前期授業の終了後、プレゼンした企画書を実現したいという有志が集まり、後期の3か月間をかけて配信用コンテンツを制作。実践型の長期インターンシップへ

■ 小学生に向けて、「仏教のひみつ」「お坊さんのお仕事」について特別授業を計2回開催（参加無料：12/3、12/18）、各回、10～20名の小学生が参加。



お坊さん 体験

仏教 分かる！
お坊さん を知る！

本物のお坊さんから学ぶ！
和太鼓の体験！
和太鼓の体験！

こどハピは「子ども達が自らの才能に気づける場所」をコンセプトに掲げた参加型オンラインスクール。

「サイエンス」「地域文化講座」「職業体験」「モテ作り教室」など学校では教えないスキルをそれぞれの専門家がわかりやすく教えるプラットフォーム。授業に無料で参加可。オンライン授業のため全国どこからでも参加可。

<https://kodohapi.com/>



【第1回：2022年12月3日（土）10:00～11:00】
- 神文化歴史博物館からLIVE中継 -
『小学生でも楽しく学べる「仏教のひみつ」』

【第2回：2022年12月18日（日）10:00～11:00】
- お坊さん（右村清隆先生と参拝部）が生出演！ -
- 和太鼓からLIVE中継 -
『お坊さんのお仕事ってどうなの？ 坐禅体験！』

アントレナーシップ養成講座 世田谷デジタルものづくりフェス 報告

駒大生社会連携プロジェクト活動報告会

駒澤大学 経済学部商学科 熊田昂

DOHSCHOOL

株式会社
Azhal Communications

2017年 世田谷ものづくり学校
「世田谷ハツメイカ-研究所」
ロボットプログラミング教室

2020年 駒沢
「DOHSCHOOL」
小中学生向けのプログラミング教室



「学び」とは何か？

《学生から出た意見》

- 価値観を広げること
- 人それぞれの考えを知ること
- 倫理的思考
- 個人の想像力（創造力）社会に適応していく力 など

現代の学びとは、個人が豊かに生きるために身に付けなければならないこと
→ 「学ぶことが楽しい」と感じてもらう必要がある




世田谷デジタルものづくりフェス

■ 日程：11月5日（土）・6日（日） 場所：駒澤大学 種月ホール

■ 2日間で約1,000人の来場

《運営方式》

- 総務：当日スケジュール管理、コンテンツ参加の Googleフォーム作成など
- 広報：世田谷区教育委員会の後援
Twitter→コンテンツ紹介
Instagram→コンテンツ紹介、スタッフ紹介
- 企画：3Dプリンターでコマを作ろう！、TRUSTLESS LIFE体験会

コンテンツ紹介



オープニング特別講演 「Web3.0」とは

Web3.0が動き出しているこの時代に、これからの時代を切り拓くためには何が必要か、これからの時代を切り拓く視点を考える講演会

【中島 聡氏プロフィール】
エンジニア・起業家
一般社団法人シンギュラリティ・ソサエティ理事

Microsoftでソフトウェア・アーキテクトとしてWindows95などを開発
現在は、Web3アプリケーションの開発

【ファシリテーター】
久木田 寛直 (株式会社 Azhai Communications)
和仁 沙央理 (駒澤大学 経済学部2年生)


10

<makeX 体験会>

■ STEAM教育とは
S (science 科学)
T (technology 技術)
E (engineering 工学)
A (Art 芸術・教養)
M (mathematics 数学)

知る (探究) とつくる (創造) のサイクルを生み出す
分野横断的学び

■ makeXとは、STEAM教育を核とした国際的なロボット
コンペティション



11



<VIVIWEAR 体験会>

■ VIVIWEARとは
ソフトウェアとハードウェアのエコシステムであり、クリエイティブなアイテム

<VEX 体験会&コンペティション>


■ VEXロボティクス
世界70カ国の子どもたちが、楽しくコンピュータサイエンスを学んでいるアメリカ生まれのロボット・プログラミング教材

12

<TRUSTLESS LIFE 体験会>

■ 近未来にブロックチェーン技術が実現するであろう未来の社会を、人と人が対面でプレイするボードゲーム

■ 駒澤大学テーブルゲーム研究会を中心に開催
当日は、同サークルが参加者にルール説明をし、行われた




13

<3Dプリンターでコマを作ろう！>

■ 駒澤大学2年生の学生が企画・運営を行ったコンテンツ

■ 本格的な3Dモデリングのアプリケーションを使って、オリジナルのコマのデザインし、作成

デジタルの素材を扱い、3Dプリンターでアナログの素材へと出力するものづくり体験




14

駒澤大学種月館を マイクラフトの世界につくろう

■ マインクラフトとは、サンドボックスゲームと言われるゲームで、砂場遊びのように目的が提示されず、どう遊ぶのか・何をするのかをすべてプレイヤーが自分で決められるゲーム

■ Mojang創業者のマルクス・ヘルソンにより開発され、現在はMicrosoft社が買収し、配信・発売されている



15



世田谷区 部門

■ **地域プロジェクトで市民育ち**

－用賀と深沢における参加型調査研究－

(文学部 社会学科 社会学専攻 李 妍焱 先生)

2022年度
社会連携
プロジェクト

地域プロジェクトで市民育ち 用賀と深沢における参加型調査研究

駒澤大学文学部社会学科 社会学専攻 | 李 妍焱ゼミ 3年 | 2022年6月～2023年1月
プロジェクト概要

本活動は、「地域プロジェクトによる市民育ち」をテーマに、参加型の質的調査研究を行うものです。日本社会が大転換期を迎えており、持続可能なライフスタイルを大切に、自分らしく社会に関わっていく姿勢と習慣を有する「主体的な市民」を如何に増やすか、とりわけ若い世代をそのような市民にどう育て上げていくべきかが、かつてないほど重要なテーマとなっています。市民リーダーや市民的センスを持つ大人たちが運営する地域プロジェクトが、市民育ちのプラットフォームに最適だと考えます。

本活動では、イベント型地域プロジェクトとして「用賀サマーフェスティバル」、居場所型プロジェクトとして「ふかさわの台所」とそれぞれ連携し、企画運営への参与観察とインタビュー調査によって上記のテーマに迫っていきます。



用賀サマーフェスティバル

用賀サマーフェスティバル (YSF) は、世田谷区用賀で2005年から14回にわたり開催されてきた地域の夏祭りの一つで、最大の特徴は、大学生がやりたいお祭りを、地域の方の協力を得ながら実現する「若者主体」にあります。コロナ前は1万5000人を動員するほどの規模に成長しましたが、コロナ禍による休止を経て、今回は4年ぶりの開催となります。開催の企画に参加するのは、発案者でYSFの生みの親でもある新井佑さん (NPO法人 neomura 代表理事) をはじめ、地域の熱心な大人たちと関わる中で学べることも当然だが、何よりも単なるお客さんから、創意工夫と協力でお祭りを創り上げる主催者という「当事者への転回」が実現できるところが意義深い。3か月にわたって企画と準備に参加するほか、YSFのOBOG11名、関わるキーパーソンの大人たち4名、合計15名に対して、1人1時間半ほどのインタビュー調査を実施しました。



ふかさわの台所

ふかさわの台所は、世田谷区深沢にある民家をリノベーションしたコミュニティスペースであり、都会での孤独な子育てに悩んでいた建築士の成見敏晃さんが、2017年にワークショップ「世田谷をDIYしよう」と「空き家等活用ゼミナール」に参加したことで誕生しました。「観客からプレイヤーへ」という合言葉が腑に落ちた成見さんは深沢の空き家を、地域の方々150名ほどの参加を得てリノベーションを行い、2018年からオープンしました。2022年度はちょうどコロナ禍から活動を再開していく時期であり、「何らかの目標達成や課題解決よりも、やりたいことをとにかく形にしてみる、その過程こそ大事」という成見さんの助言の下、ゼミ生たちは台所で「お菓子のまちづくり」や「大人の語りBAR」などの企画を、試行錯誤しながら複数回実施してきました。「地域のため」という名分とプレッシャーに縛られないからこそ、のびのびと「プレイヤー」になる体験が得られました。さらに台所に関わる3名の方のインタビュー調査も行いました。



参加型調査研究の成果—地域プロジェクトで市民性が如何に育つか

インタビュー調査と参与観察を通して明らかにしようとしたのは、「若者たちの市民性の育成が地域プロジェクトにおいて如何に効果的に可能となるか」である。この問いに迫っていくために、主には地域プロジェクトのデザインに関わる大人たちと、地域プロジェクトに参加していた学生の OBOG たちを対象にインタビュー調査を行い、さらに私たち自身も活動の企画者、主催者側となり、参与観察を行った。ここで言う市民とは、「人間と社会がもつべき新しい価値観を意識し、市民的な資質を持って、所属するコミュニティにおいて主体的に実践する者であり、且つコミュニティ内に限定されないフラットでオープンな感覚を持ち合わせている存在である」と、先行研究を踏まえたうえで定義している。

YSF の OBOG に見られた市民性の成長（市民性を示す 8 項目による自己評価）

	市民性が獲得しやすい感性		市民性の土台を成す価値観		市民性を実践するスキル			市民性獲得の成果と達成
	ポジティブ/楽しむ姿勢と心	共感力/抵抗力	寛容さ/開放性	対等性と多様性・他の尊重	行動力/自由度	多様な視点/批判的視点	言語化する力/話し合う力/熟議の力	
Iさん	6/9	8/8	6/6	7/8	6/9	2/5	4/5	5/8
M1さん	5/10	7/8	4/9	5/7	5/9	5/7	4/8	5/10
N1さん	6/8	6/9	5/5	6/8	4/8	5/7	3/7	3/9
Sさん	7/8	7/8	6/7	8/8	5/8	7/8	8/8	9/9
K1さん	8/9	7/7	6/6	6/7	8/8	6/7	4/5	5/6
K2さん	3/10	10/10	5/8	7/8	5/9	3/6	2/6	3/8
T1さん	5/7	6/6	5/8	7/7	6/9	5/6	4/7	8/8
Uさん	6/8	8/10	7/7	7/7	6/10	5/6	5/8	6/8
N2さん	8/9	10/10	8/9	10/10	9/8	7/7	7/8	7/9
M2さん	5/7	6/7	6/9	6/9	8/8	6/7	6/8	2/9
T2さん	7/8	5/7	5/8	5/9	8/10	7/8	7/8	7/9

※10点満点で活動参加前と参加後の自己評価の数字を/の前後に並べています。3度数以上の変化があった項目はグリーン、5度数以上の変化があった項目はオレンジに塗りつぶして表示しています。

若者の市民育ちに資する YSF の特徴

1. 来るもの拒まずの精神が根付いており、参加のための入口が広く用意されている。
2. 「お祭り」という大枠だけ定まっており、自由にコンテンツを入れられるため、「とにかくやってみる」ことが許される環境。
3. 長年地域で継続してきた、中心となる組織（NPO 法人）や協力する商店街組織がある安心感。
4. ゴール（実施の期日）が決まっているイベントであり、とにかくそれに向けて進めなければならないという条件設定。
5. 大学生へのエンパワーメント（権限移譲）。
6. 多様な人との関わり、特に、「大人の仕事ぶり」と立ち振る舞いを間近で見られること。偶然の出会いも多い。
7. とにかく話し合う場面がたくさんある。
8. ポジティブで、楽しもうという姿勢がないとそもそも入りづらい（入っても持続が難しい）雰囲気のコミュニティ。
9. モチベーションの保持に、違和感を言語化でき、それを共有できる場がある。「思いの言語化」を重要視。

若者の市民育ちに資する地域プロジェクトの大人たちの特性

1. 一人一人個性的でありながらも、共通して見られる特徴として、地域プロジェクトに関わる大人たちはポジティブさと行動力を併せ持つことが多く、何よりも自分起点で楽しさを重視する傾向にある。また、共感力と抵抗力、寛容さと開放性、さらに多様な視点/批判的視点を重視しており、広くて深い受け皿とオルタナティブを志向する態度が備わっている。
2. コミュニティに向かうそれぞれの動機を持っており、人とのつながりによる愛着を抱き、ライフステージに応じて当事者としてコミュニティに「深入り」している。
3. 若者を巻き込んでいく上で、「来るもの拒まずの精神」を共有している。
4. 情熱的に、もしくは自由気ままに、あるいはスマートに、またはありのままの自然体で、それぞれ自分らしく、自分の考え方や価値観を十分に表現した形で、地域プロジェクトに楽しく関わっている「当事者として楽しむ大人」の姿。
5. フットワークの軽さと人脈の広さ、仕事のスキルと豊かな人生経験、社会経験が物語る「大人としてのカッコよさ」。

産官学連携 部門

■ **産学連携による新商品開発と
新たな販路開拓の実践プロジェクト**
～地場産業の新商品開発と中小企業の海外販路開拓の事例～

(経済学部 現代応用経済学科 吉田 健太郎 先生)

産学連携による新商品開発と新たな販路開拓の実践プロジェクト - 地場産業の新商品開発と中小企業の海外販路開拓の事例 -

【プロジェクト概要】

・プロジェクトの目的

本プロジェクトは、持続可能な社会の実現を切り口として、新商品開発と販路開拓について、ゼミで企画する以下の3つの販路開拓と新商品開発の実践により、産学連携の有効性を検証する。具体的には、(1) 京都老舗和菓子屋のマレーシア進出のための新商品開発(販路開拓)とコミュニケーションチャンネル(専門チーム)の立ち上げ、(2) 静岡のお茶農家の体験型観光である「茶摘み体験」を本業である「お茶(茶葉)」の販売につなげるための新商品開発と販売方法の構築、(3) フィリピンでオフショアアウトソーシングに取り組む日系中小企業の外国人材の日本市場開拓とトータルサービスの開発を行う。産学連携によるこれらの新商品開発と販路開拓の活動実績の分析から、どのような成果や波及効果が生まれるのかを明らかにする。

・連携方法、実際の活動

本プロジェクトでは、3つのステップでプロジェクトの発展を図る。第1段階では、ウィズコロナ・アフターコロナに通用する新商品開発と新たな販路開拓の構築を念頭におきながら先行研究の整理と先進事例のリサーチを実施する。その上で、仮説導出のためのデータとなる調査企画を立て調査を実施する。第2段階では、調査結果を踏まえ、連携企業の競争優位を把握し、適用するフレームワークを絞り込み、連携企業とともにビジネスプラン案を作成する。その際、現地での丹念なフィールドワーク(参与観察)を遂行し、連携企業自身が把握しきれていない競争優位と顧客の潜在ニーズの事実発見を探索する。第3段階では、「ビジネスプラン」を検証するために、これまでの調査結果の分析を踏まえ、連携企業とのディスカッションを通じて実際に新商品(新サービスを含む)の開発と販路開拓(必要に応じて販売会イベント)を実施する。

以上の計画のもと、今回実際に行った活動は、次のとおりとなった。検証事例(1)では、①マレーシア市場の調査分析、②ターゲットの設定、③商品コンセプト策定、④試作品開発、⑤ターゲット層となる中華系マレーシア人に向けて試食会を実施、⑥リッカート尺度を用いたアンケート調査の実施、⑦チームへのフィードバック、⑧新商品開発を行い、市場調査に関わる情報収集のためにジェトロ京都で資料収集と聞き取り調査を実施した。また、新たなチーム編成と機能のために石田老舗本社を訪問し、参与観察とディスカッションを実施した。続いて検証事例(2)では、①フィールドワークと新商品の試作、②1回目検証調査実施、③検証結果の分析、④顧客のニーズ調査・分析、⑤連携先とのブレインストーミングと試作、⑥2回目検証調査(イベントを実施)、⑦リッカート尺度を用いたアンケート調査の実施、⑧検証結果の分析・一般化のための参与観察を行った。そして、検証事例(3)では、①市場調査・分析、②課題抽出、③先進事例の聞き取り調査、④外国人材への聞き取り調査、⑤課題克服のためのビジネスプランの提案(現地で社員にむけて英語でプレゼンを実施)、⑥帰国後にビジネスプランのブラッシュアップを実施した。※予算は、各事例のフィールドワークにおける旅費(交通費、宿泊費)の一部として使用した。

・連携先

検証事例(1) 株式会社石田老舗

検証事例(2) 株式会社蔵屋鳴沢

検証事例(3) プライムマンパワー・ジャパン合同会社

※プロジェクトの活動報告については、検証事例1を代表して報告を行う。

【検証事例1（多角化戦略班）】

京都で100年以上の歴史を持つ連携企業が展開する菓子専門店において、海外販路開拓に向けた新商品開発を通して、同社の持続的な成長と地場産業の発展につなげるための仕組み構築を行った。まず、先行研究の渉猟による文献調査と3つの先進事例に対する聞き取り調査から、資源に限りある零細企業が海外進出にむけた新たなイノベーションを創出し多角化を成功させるための要因に、アントレプレナーシップ・マーケティング・人材育成・技術の4つの要素が関連していることを明らかにした。また、先行研究の分析から、経営資源に限りある中小企業の「多角化戦略」には、独自技術を徹底的に追及しつつ同時に新たな事業機会を探索する、「両利きの経営」の理論が有効になるのではないかと仮説を立てた。その後、これらの4つの要素をどのように結び付けイノベーション創出につなげていくのかという問いのもと、地場産業の国際化と新たな販路開拓に成功している産地企業に対する参与観察調査（佐賀県及び長崎県にてフィールドワーク）を実施した。フィールドワークで得たデータの分析の結果、共通のミッションを掲げるコミュニケーションチャンネル（専門チーム）を設置し、チーム構成員のそれぞれの専門的な視点から擦り合わせを行うことが、専門チームを機能させイノベーション創出へと結びつけるポイントになっていることを発見した。


以上を踏まえ、伝統地場産業のイノベーション創出につながる社内体制の仕組みづくりを実践し、イノベーション創出に向けて、連携企業内にコミュニケーションチャンネルを機能させるため、海外販路開拓のための商品開発という共通するミッションのもと、新たな「チーム」を編成し、マレーシア市場に向けた新商品開発に取り組んだ。その際、先行研究から立てた仮説を実践に応用し、連携企業に提案し、チーム内で徹底的に擦り合わせを行った上で、試作品を完成させた。販売戦略を立案するため、参加学生らは、市場調査やアンケート調査、試食会等を実施し、エビデンス収集を行い、中小企業に不足するマーケティング要素を補完する役割を果たした。

【3つの検証事例の共通点からいえる成果】

3つの事例の共通点として、研究室と連携企業が互いの知識や認識を共有することで両者が目を向けられていなかった視点を補完し合うことで、新たな発想が生まれたり、新たな手法を取り入れられたりする行動特性が観察できた。これらは、産学連携がもたらす波及効果といえる。

参加学生らと連携企業は、密なコミュニケーションを通じて、研究室の強みでもある調査や分析を行い、顧客のニーズを可視化し、それを共有し議論するという協働作業を繰り返してきた。その結果、参加学生らは教場で学ぶPDCAサイクルを回しながら新商品開発と販路開拓を行うことの重要さと現実的な難しさを同時に肌感覚で学ぶことができていた。また、キャンパスを飛び出し、座学で学んできた諸理論を現場で実践することで、理論の有効性と限界の両方を同時に実感するなど学びの幅も視野も広がっていた。議論はときに対立することもあったが、プロジェクトの前進に大きく影響する「人や組織との関係性」を構築する「人間力」と「コミュニケーション力」の重要性に気付かされる場面が散見された。一方、連携企業らは、自社の強み（優位性）を再確認するとともに、学生たちの新たな発想や研究の視点が加わることで、アイデアの創出と実装するための具体的なヒントを得ていたように感じる。大学は、理論に基づく科学的根拠のある手法と長期的視点から研究を遂行する特徴がある。客観的かつ中長期的な視点から経営を捉え直すことで、持続的な成長に対する問題意識を改めて考えさせられるきっかけになったように思う。言わずもがな、イノベーション活動に伴う最新のマーケティングを応用した取り組みを協働で実践する中で、参加学生と連携企業の双方にとって商品開発や販路開拓の方法の学習機会となったことは成果の一つといえよう。


特筆すべきは、3つの各事例間で企業の事業や学生の研究テーマは違えど、課題やそれに対する解決策に共通点が少なくなかったことである。そのため、3つの事例を同時並行で進め、課題や解決策をはじめとして情報を共有しながらお互いの事例から学び合うことで、上掲で述べた、中小企業と大学との産学連携の有効性の一般化に向けた示唆を得ることができた。紙面の都合上、具体的な課題については「活動報告書」の中で詳述する。最後に、プロジェクトにご協力くださいました連携企業の皆さまに心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。



産官学連携 部門

■ 社会連携ゼミ交流会

(経済学部 現代応用経済学科 大前 智文 先生)



令和4年度「駒大生社会連携プロジェクト」(産学官連携部門)

社会連携ゼミ交流会 活動報告

プロジェクトの概要

「社会連携ゼミ交流会」とは、社会連携活動をゼミ活動に取り入れるなど関心・実績がある学内ゼミを一堂に会し、参加者間の情報交換や連携・交流活動を活発化させることを目的として、2021年度より開催している企画である。

第二回目となる本年度は、2022年12月17日の土曜日午後(14:00から16:30)に開催した。経済学部、経営学部から7ゼミが参加し、学生による社会連携活動の報告と交流・情報交換ワークショップを行った。参加ゼミは以下の通りである。

社会連携ゼミ交流会 参加ゼミ

経済学部	明石 英人 ゼミ	経済学部	大前 智文 ゼミ
経済学部	長山 宗広 ゼミ	経済学部	松田 健 ゼミ
経済学部	松本 典子 ゼミ	経済学部	吉田 健太郎 ゼミ
経営学部	鹿嶋 秀晃 ゼミ		

また、本年度の新たな試みとして、各ゼミ連携先の企業・団体の関係各位を招聘しご講演・ブースでのご対応をいただいた。当日ご参加いただいた各ゼミ連携先は以下の通りである。

社会連携ゼミ交流会 参加連携先

安城建築株式会社	浅井 宏充 様	大前 智文 ゼミ
株式会社シンシアーヂュ(Sinsierge Inc.)	湯澤 剛 様	長山 宗広 ゼミ
NPO 法人 neomura	平床 麻子 様	松本 典子 ゼミ
サガコレクティブ協同組合事務局長	山口 真知 様	吉田 健太郎 ゼミ
日本労働組合総連合会(連合)	田畑 智哉 様	鹿嶋 秀晃 ゼミ

実施内容

第一部では参加ゼミによる活動・研究内容、連携先の紹介を1ゼミ10分程度で報告した。第二部ではブース展示による「企業説明会」や「ポスター発表」のような形式から、より具体的な社会連携活動の内容や課題などを交流・コミュニケーションを通じて共有した。

コロナ禍ということもあり、参加者は100名程度に留めた。会場は「種月ホール」を臨機応変に形態変更して利用した。第一部・第二部ともに時間的・スペース的な余裕を設けた。またプロジェクト等の発表機材・設備の充実を図った。

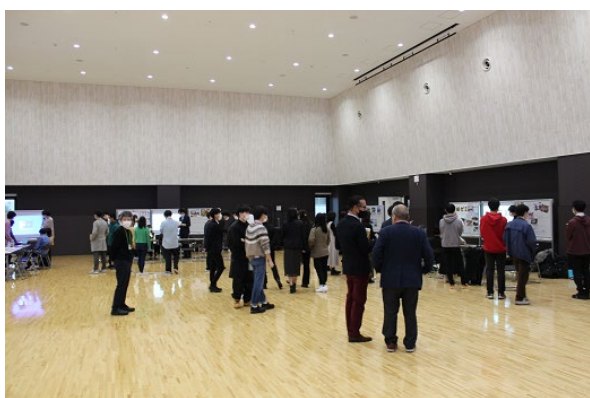
特に昨年の反省点としては社会連携ゼミの交流会であるにもかかわらず、その連携先の姿が見えにくいという課題があった。各ゼミには印刷費や連携先を招聘するための謝金・交通費などを手当てする旨を伝え、ゼミ活動の一環としてのイベントとして活用していただく環境を整えた。

当日の様子など

第一部 前方での発表



第二部 会場の様子



第一部 会場の様子



第二部 ブースでの発表



プロジェクトの成果

各ゼミの活動内容から課題へのアプローチ方法や成功・失敗の事例などが蓄積され、様々なモデルケースを読み解く機会となった。これら全学部横断的な社会連携活動の蓄積は本学の財産となっていくだろう。また、本年度は各ゼミ連携先を招聘し、各ゼミとの関係深化に加え、本学の社会連携活動に関するポテンシャルを周知することができた。このような活動を継続することにより、駒澤大学そのものがビジネスの課題や社会的な課題を解決する能力を備えつつ、広く地域社会との結びつきを志向し、地域活性化を主導するようなプラットフォームの中核として機能することを期待する。また、社会連携ゼミ交流会の参加者がそれぞれのフィールドで取り組む諸課題への挑戦する事例は新規事業のアイデアの宝庫である。これらが交流会を通じてコミュニケーションを図り、問題意識・課題解決に向けた熱意を共有し、本活動から新しいビジネスが誕生することも期待したい。

参加ゼミとしては、年末12月の社会連携ゼミ交流会を発表の機会として意識し、ゼミナール活動を計画的に実施することができた。グループの発表をまとめる場面、約100名の参加者の前で発表する場面、ブース発表での振る舞いや聴衆を呼び込むための工夫など、普段のゼミ活動を超えた他者・他ゼミとの交流の機会は貴重であり、様々な学びの機会となった。また社会連携先との結び付きを強める機会としても活用することができた。

最後に、本年度プロジェクトの反省点・課題として、①どの程度の参加者数が望ましい水準であるのか、②イベント開催の周知徹底、③イベント準備・会場設営にかかる問題が挙げられる。

産官学連携 部門

■ **難民を知り、共生へ ～クルド人に学ぶ～**

(法学部 政治学科 三竹 直哉 先生)

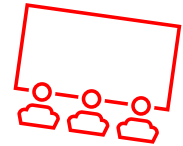
来場者満足度

93%!!

2023年2月18日(土)

令和4年度 駒大生社会連携プロジェクト 成果概要

〔産官学連携部門〕「難民を知り、共生へ ～クルド人に学ぶ～」
法学部政治学科 三竹ゼミ



【活動目的】

私たち三竹ゼミは、より多くの方々に、難民問題について一緒に考え、少しでも身近に感じられる機会をつくりたいという思いから、プロジェクトに参加致しました。

【活動概要】

実施日:2022年12月17日(土)

第1部:映画「東京クルド」の学内上映会

第2部:日向史有監督トークセッション

(※来場者より募集した映画や日向監督に関する質問・感想に基づく)

【広報活動】

チラシ配布 **500** 枚(3エリア:駒沢、桜新町、三軒茶屋の中学校、高校、飲食店等 約50店舗)

ポスター掲示・構内での呼びかけ・SNS 運用

上映会当日の配布物作成(写真左)

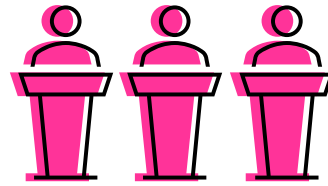
↪ 上映会当日の様子 ↩



【当日の様子・実績】（アンケート集計結果に基づく）

動員数: 51名

満足度: **93%**



～来場者の声～（アンケート一部抜粋）

Q.「難民のイメージはどのように変化しましたか」

A.・自分たちが見えていない問題で向き合うことが大事。（22歳 男性）

・将来の夢があり、自分の可能性を信じてみたいという気持ちは日本人の若者と変わらないという事。（42歳 女性）

・やりたい事の想像力も分からないという状態は映画を見ないと分からなかった。（29歳 男性）

・難民申請が通るまでは、「難民」にもなる事ができない残酷な環境にいる。（21歳 女性）

Q.「自由記述」(感想)



A.・講演で入管スタッフ側の心情を知れて良かった。現在の2人の近況を聞いて嬉しかった。自分たちができること、改めて感じた。（31歳 男性）

・東京クルドをなかなか観る機会を逸していたが今回の上映会は大変有難かった。素晴らしい企画をありがとうございました。（63歳 男性）

・トークセッションを聞いて、入管職員の人でも苦しんでいることにびっくりした。システムが悪く、入管職員が悪ではないことを知った。上映会、トークセッションの企画から当日準備までありがとうございました！とても勉強になる上映会でした。（23歳 女性）

・日向監督の解説があってより深く学べて、とても上映会に来させていただいてよかったと思えた。（21歳 男性）

【所感】

準備の過程で大変なこともありましたが、教場にほぼ満員のお客さんの来場の様子に驚いたとともに、大変嬉しかったです。参加した皆さんにとって、今回の上映会が難民問題についてさらに深く考える契機となり、上映会に込めたゼミ生の思いが来場者に伝わっていたら幸いです。主催側である私達も講演会で、入国管理局職員の方の立場・視点を学びました。改めて、特別な支援をする前に当事者が置かれた状況を知ることが大切だと認識しました。

この経験を活かし、来年度はどのような活動を行うか検討していきたいです。



SDGs 部門

■ **新入生セミナー×現代応用経済学科ラボラトリ コラボ企画**
「現応ラボ 社会連携・SDGs活動セミナー」
「現応ラボ 社会連携・SDGs交流会」

(経済学部 現代応用経済学科 山田 雅俊 先生)

SDGs 部門

プロジェクト名：新入生セミナー×現代応用経済学科ラボラトリ コラボ企画「現応ラボ社会連携・SDGs 活動セミナー」「現応ラボ社会連携・SDGs 交流会」

代表者・発表者：山田雅俊（経済学部現代応用経済学科教授）

1. 本プロジェクトの目的と意義

- ・目的：社会連携そのものの理解と SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）というテーマを通じて「大学」、「学生」、「企業・団体」間の連携・交流の萌芽となるような機会を提供すること
- ・大学にとっての意義：社会連携のノウハウや経験の蓄積
- ・学生にとっての意義：社会・経済・企業・団体との多様な接点と学習の機会
- ・企業・団体にとっての意義：SDGs 活動実践と新たなステップとなるような気づき

2. 活動実績

- ・「世田谷区の産業、その社会連携活動・SDGs 活動に関するシンポジウム—駒澤大学に寄せる期待—」を2回に分けて実施

<1回目>

日時：2022年6月23日（木）16:20～17:50（新入生セミナーの授業1回分を活用）

場所：駒澤大学世田谷キャンパス3号館4階種月ホール

当日のプログラム

司会：大前智文 先生（経済学部現代応用経済学科 准教授）

16:20 事務連絡

16:25 挨拶 長山宗広 先生（現代応用経済学科ラボラトリ所長・経済学部現代応用経済学科 教授）

16:30 参加企業・団体による報告

①世田谷区経済産業部産業連携交流推進課（宮城正裕 氏 [同課主任]）

②昭和信用金庫営業支援部事業支援課（武藤章仁 氏 [同部副部長]）

③dot button company 株式会社（中屋祐輔 氏 [代表取締役]）

17:40 質疑応答

17:50 終了

<2回目>

日時：2022年7月7日（木）16:20～17:50（新入生セミナーの一授業1回分を活用）

場所：駒澤大学世田谷キャンパス3号館4階種月ホール

当日のプログラム

司会：山田雅俊（経済学部現代応用経済学科 教授）

16:20 事務連絡

16:25 参加企業・団体による報告

①オイシックス・ラ・大地株式会社

②株式会社 shabell(shabell Inc.)

③ロート製薬株式会社

④一般社団法人 NHK サービスセンター

⑤リコージャパン株式会社

16:55 各企業・団体のブース展示

17:40 閉会挨拶ならびに事後連絡

3. プロジェクトの達成状況

- ・当初の計画通り、2日間の企画・イベントを開催することができたため、「社会連携そのものの理解と SDGs というテーマを通じて大学、学生、企業・団体間の連携・交流の萌芽となるような機会を提供する」という本プロジェクトの目的は達成できたと考える。
- ・大学には社会連携のノウハウや経験の蓄積、学生には社会・経済・企業・団体との多様な接点と学習の機会、企業・団体には SDGs 活動実践と新たなステップとなるような気づきなど、三者三様のメリットも全体として享受できたと見えよう。
- ・7月7日のイベントにおいて、就職活動を目的として参加企業のスタッフと Line を交換する学生も見受けられたことから、企業・団体にとってリクルートにも直結する企業・団体の魅力を直接情報発信することができる機会となったと思われる。また、学生にとって本学で学問を学び社会人として卒業していくという自覚を形成する機会となったと思われる。

4. 今後の課題

- ・イベント会場には 2022 年度の現代応用経済学科新一年生「新入生セミナー」受講生 6 クラス 167 名分の座席(パイプ椅子)を設置したが、空席も多かった。その点、参加頂いた企業・団体には大変申し訳ないことをした。
- ・本プロジェクトの企画を「新入生セミナー」の授業 2 回分に充てて実施したため、学生に本プロジェクトの意義や重要性が十分に伝わらなかったと思われる。学生への情報発信と学生自身の自覚形成が課題である。

以 上